

今週は、主イエスのこの世での最後の一週間を記念するときです。かつてはよく受難週と呼ばれましたが、現在では聖週と呼ぶのが普通となりました。私達の罪を負って十字架にかかれた主イエスを偲び、主なる神の救いのみに感謝をささげるときであります。本日は、主イエスの最後の一週間を振り返ってみたいと思います。

本年は皆様と行うことができず残念ですが、礼拝の最初で棕櫚の礼拝を行うつもりでした。これは過越の祭りと共に十字架にかかれるためにエルサレムに来られた主イエスが、かねて用意しておいたロバの子に乗って入城されたのを、民衆がホサナホサナと棕櫚の葉を手に持ち、衣を道に敷いて迎えたことを記念するものです。このことから私達は今日の日曜日を棕櫚の日曜日、パームサンデーと呼んでいます。これが主イエスの受難物語のスタートとなります。

本日祭壇は赤が使われます。従来本日は紫でありましたが、主イエスが血を流されたことを記念して赤が用いられるようになりました。行列をしたり、赤を用いますのも、私達が主イエスの受難を自分自身の問題として受けとめるためなされるようになってきたのです。

さて、主イエスは弟子達と共に夜はベタニヤに行って泊まりました。ベタニヤはエルサレムから数キロほど離れたところにあり、主はかねてより宿泊場所を定めておかれたようです。

こうして日曜日は終わり、月曜日となりました。朝になり、主イエスは弟子達をつれてエルサレムにのぼります。一向の目に神殿の入口で両替をしたり、犠牲のハトを売っている人々がとまりました。彼らは礼拝をささげる人達にとって必要な存在でした。ささげられるハトや、神殿で通用する通貨は厳しい定めがあったからです。それをよいことに、彼らは法外な手数料を取って私腹を肥やしていたのです。清い心をもって礼拝をささげようとする人々を汚そうとする彼らに、主イエスの怒りが発せられました。それが余りにも激しいものでしたので、エルサレムの町中がざわめきました。このことからこの日を、不安の月曜日と呼びます。人々は恐れながらも、主イエスの存在に関心を持っておりました。夕方となり、主イエス一向はまたベタニヤに帰られました。

翌日、火曜日の朝になり、主イエス一向はまたエルサレムの神殿にのぼります。彼らを待っていたのは、主イエスにさんざん非難されているファリサイ派の人や律法学者たちでした。彼らは何時か主イエスの殺してしまおうと考えておりましたが、過越の祭りの間はよそうと話し合っておりました。民

衆が主イエスに魅力を感じているので、その前で殺してしまったら自分達に帰ってくるはずの民衆が帰ってこなくなってしまうと考えたのです。彼らの関心は、どこまでも民衆からの尊敬でありました。しかし、目の前にいる主イエスをそのまま容認してはおけませんでした。様々な形で議論を仕掛けます。いつものように彼らは勝つことができず、主イエスから激しく非難されてしまうこととなります。彼らはますます主イエスを殺そうとする気持を固めました。十字架にかかれた主イエスは実は十字架にかかるような罪人ではなく、誠に正しい方であったのを改めて思わされる場面です。このことからこの日を議論の火曜日と呼んでいます。そしてこれが主イエスのこの世での最後の議論となったのです。夕方になり、一向は再びベタニヤに行かれました。

翌日の水曜日、主イエス達は一日エルサレムには行かれませんでした。聖書の中にもこの日のことはほとんど述べられておりませんが、静かに黙想をされておられたようです。この日を黙想の水曜日と呼んでいます。主は福音書の記述からも明らかなように、ご自身に定められた十字架を御存知でしたから、それを翌日に控えた主は、いったいどんなお気持ちでおられたのでしょうか。

翌日の木曜日、弟子達と共に一日を過ごされた主イエスは、最後の夕食を共にします。ここで主イエスはパンを取り、感謝してこれを裂き、弟子達にこれは私の体である、と与えられ、食事の後ぶどう酒をとり、感謝して弟子達に与え、これは私の血であると言われました。このように聖餐式を定められ、同時にこの世の終わりが来るまで常に聖餐式を行うよう命じられました。この日を聖餐制定の木曜日と呼んでいます。教会では、聖餐式は原則として午前中にしか行いませんが、この日だけは夕方に聖餐式を行うようになりました。私達もまたその最後の晩餐の席に共にいるのが聖餐式ですが、定められたその時に、私達は時間を超えて主と共にいるのです。

食事の後、主イエス一向はゲッセマネの園へ向かいました。ここは主イエスが祈るためによく用いられ、主の愛された場所でありました。ここで主イエスは、来たるべき受難を思い、激しく祈られました。主イエスにとっても十字架は大変な重荷であり、避けられるものなら避けたいと思っておられました。弟子達はこの気持も知らず、睡魔に襲われ眠っていました。起きていなさいと言われても、守ることは出来ませんでした。その最中に、弟子の一人イスカリオテのユダが兵隊たちをつれてやってきました。ユダの心にはサタンが入っており、主イエスの義や存在の大切さより金銭の方が大切になっていたのです。主イエスは捕えられ、翌日の金曜日にかけて、最高法院による裁判にかけられました。そのあいだにペテロは民衆から主イエスの仲間

だったといわれ、怖くなって三回も主イエスを知らないといってしまうました。それは主イエスが前に言われたとおりでした。

遂に主イエスはユダヤを属州支配していたユダヤ総督ピラトによって十字架刑を宣告され、十字架にかかります。ここで主イエスは七つのみ言葉を発せられました。これは受苦日に皆様と共に黙想しながら味わいたいと思っておりますが、愛に溢れる主イエスの姿がよく現わされております。この日を受苦日、おん苦しみの金曜日と呼んでおります。十二時頃から三時頃まで主イエスは苦しまれ、遂に息を引き取られました。それを見ていたローマの百人隊長が、主イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言いました。そのお姿には大きな力があったのです。

主イエスの遺体はアリマタヤのヨセフという人が自分のために用意していた墓に治められました。翌日の土曜日は安息日でしたので、誰も墓に行きませんでした。この日を安息の土曜日と呼んでいます。そして喜びの復活日となるのです。

教会では今週、主イエスの受難を記念し、過ごします。皆様方もこの一週間で主イエスのこの世での最後の時を思い起こしながら過ごしていただきたいと思えます。棕櫚の日曜日、不安の月曜日（宮清めの月曜日とも言います）、議論の火曜日、黙想の水曜日、聖餐制定の木曜日、御苦しみの金曜日、安息の土曜日、私達のために死なれた主イエスが語りかける言葉が、きっと聞こえてくることでしょう。主に栄光がありますように